



高 秘 第 7 号
平成19年4月25日

国土交通省道路局長 様

高萩市長 草 間 吉 夫



中期的な計画の作成にあたっての意見書について

平成19年4月2日付け国道企第114号で依頼のあつてこのことについて、
別紙のとおり提出します。

中期計画作成についての意見書

平成19年4月19日作成

茨城県高萩市長 草間 吉夫

中期計画作成についての意見書

茨城県高萩市長 草間 吉夫

*はじめに

日本は古来より豊葦原瑞穂国と語り継がれてきた。自然豊かな国、それが日本である。私は地域を含め国が長期に亘りより繁栄していく観点に立って、以下2点について私見を述べたい。

1. 地方にこそ交通網整備が必要

日本の国土の67%は山林で覆われている。わが国は海に囲まれ山を多く頂く国である。外から訪れる人は、「日本は海の民と山の民が住む豊かな国である」との印象を強く持つだろう。日本神話における国づくりの過程でも、海幸彦と山幸彦兄弟の話が登場している。

わが国は起伏の少ない平野に人口が集中しているため、平野には大都市が多く形成されている。関東では東京、関西では大阪、中部では名古屋、北海道は札幌、九州は福岡といった具合にである。冒頭で述べたように日本は山が多い。地方の多くの市町村は、山に囲まれて所在している。「都市は平地、地方は山」が日本の国土の特色なのである。

言うまでもなく、大都市には都市機能すべてのインフラが整備されている。道路もしかりである。起伏が少ない分、工事効率がよく費用効果も図られる。しかしながら、地方は起伏がある分、工事費用高に加えて工事効率が悪くなる。これが実態である。

かつて1千年にわたって繁栄した国がある。ローマである。ローマ史に造詣深い作家の塩野七生女史は著書の中で、「ローマ街道の最大の特質は、街道の距離数ではなく、ネットワーク化されていたことにある」¹⁾と、繁栄の礎に街道のネットワーク化を挙げている。経済における繁栄の血流はまさに交通網ネットワークにある。つまり、交通網が繁栄の下支えをしていると言える。

歴史に学び、わが国の国土の実態を見つめると、果たしてどうだろうか。都市にはヒト、モノ、カネ、情報が一層集中し、今や不景気を克服し景気上昇の恩恵を甘受している。その一方で、地方は停滞に甘んじている。ますます個人間においても都市と地方においても格差が広がっている。

ローマのように1千年も続く持続的な繁栄国家をわが国が本当に目指すならば、交通網の整備は不可決である。「都会は整備、地方は未整備」という実態が解消されない限りにおいては、繁栄はおろか景気回復もおぼつかない。格差も是正されない。

本市においては市の85%が山林で占める山間地に所在する。隣市や隣県へ行くには山を越えなければ辿り着けない。本市としては、国に交通網をさらに整備しネットワークを推進して頂いて、景気回復を図りたいと考えている。わが国、わが国土の中では、

地方にこそ交通網整備が強く求められる。このことを国に強く意見したい。

最後に次のことを紹介しこの項を締めたい。塩野女史は、ローマのインフラ事業の意義を以下のように書いている。「インフラとは、経済力が向上したからやるのではなく、経済力を向上するためにやる」²⁾。私たちが歴史に真摯に学ぶならば、ローマから得られるものは数知れない。

2. ビューティフル・ルネッサンス・プロジェクト創設

安倍首相は「美しい国づくり」を国家ビジョンに掲げた。「文明の海洋史観」を世に出し国際的学者の仲間入りした川勝平太・国際日本文化研究センター教授は、『『美の国』日本をつくる』を著し、美の国づくりを実現するための大胆な構想と具体的な方策を提案している。

イタリアはベネチア商人のマルコ・ポーロが東方見聞録の中で、日本をジパングと表現し黄金の国と紹介している。明治期に日本を訪れた多くの外国人も、日本の生活様式や景観が美しいと書き遺している。「日本奥地紀行」を著したイギリスのイザベラ・バード女史³⁾はその代表の一人だ。

日本が美しいことは内外の多くの人々が認めているところである。しかしながら、果たして今の日本は美しいのだろうか。美しい景観が遺されているのだろうか。それは否であると私は思う。かつてあった里山は姿を消してしまったからだ。白砂青松の海岸が残されていないからだ。景観美を損なうこの2点を持ってして、日本は美しくなくなったと断言できる。

前項冒頭で日本は海に囲まれ山を頂く豊かな国と述べた。美しい国であるためには、国土の特性を最大限生かし切った景観の整備が求められる。名付けて「ビューティフル・ルネッサンス・プロジェクト (BRP)」、美復興プロジェクトである。わが国の景観美を復興するために資する事業に対して予算化することを提案したい。

例えば海岸について言えば、周辺環境に溶け込み違和感のないコンクリート等を用いて堤防やテトラポットを整備することが考えられる。河川についても同様である。環境先進国ドイツでは、このような整備が進んでいると聞いている。わが国でも一部始まっている。

また山間部へ続く道路についても、山並みや木立ちをより綺麗に引き立てる観点での環境調和型の舗装整備が求められる。環境土木という工法が、とても有効であると聞いている。

7割を占める山里と四方を海に囲まれ清流が大海に注ぐ国土を持つわが日本を、環境土木工法によって今一度再整備を図れば、必ずや1000年先の子々孫々に誇れる美しい日本が再興できると私は強く確信している。後世に引き継ぐためにも文明史観的な観点から、美復興プロジェクトを進めるべきである。このプロジェクトは、安倍首相の「美しい国づくり」にも合致する。

そう遠くない将来、全国津々浦々でかつてあった景観美が復興出来たならば、小泉前首相が推進した観光立国日本「ビジッド・ジャパン」にも大きく寄与する。外国からの

観光客が増えることは、ジョセフ・S・ナイ・ハーバード大学教授が提唱するソフトパワーの向上にも資する。このことは国益の拡大化にも貢献する。

国土整備は単純で浅はかな発想で行ってはならない。日本の本来の国土の姿、文明史的、国益的といった多面的で長期的且つ根源的な観点で国土整備を進めなくてはならないと、私は心底そう思う。

わが国はそれが出来る。2千年以上の歴史を有し、先人が築いた輝かしい伝統を繋いで今日まで永らえているからである。

*おわりに

以上、私が考えるわが国の国土整備を述べてきた。最後にもう一度塩野女史の言葉を紹介したい。彼女が文献や資料、遺跡などをつぶさに調査して辿り着いたローマ人のインフラ整備に対する結論は、「人間が人間らしい生活を送るためには必要な大事業」だった。私もこのような観点で国土整備を捉えていきたい。

注

- 1) 「ローマ人の物語X」, 塩野七生, 新潮社, 2001, p.50
- 2) 「ローマ人の物語X」, 塩野七生, 新潮社, 2001, p.96
- 3) 「日本奥地紀行」, イザベラ・バード, 平凡社, 2000, pp.211-223

バードは米沢平野を訪れて、エデンの園と表している。そこで農村の美しさや人々の勤勉さを感じ取っている。

参考文献

- 1) 「ローマ人の物語X」, 塩野七生, 新潮社, 2001
- 2) 「美しい国へ」, 安部晋三, 文春新書, 2006
- 3) 「日本奥地紀行」, イザベラ・バード, 平凡社, 2000
- 4) 「文明の海洋史観」, 川勝平太, 中央公論社, 1997
- 5) 『美の国』日本をつくる」, 川勝平太, 日経ビジネス文庫, 2006
- 6) 「ソフトパワー-21世紀の国際政治を制する見えざる力」, ジョセフ・S・ナイ, 日本経済新聞社, 2004